



妖籠記・カゴタケに捕らわれた話

菊乃

あくまでも個人的に、2018年はきのこが少なめの年だった。とってたしかに去年よりは良くないものの不作というわけでもなく、それなりに美味しい思いもしていたし、珍しいきのこの観察にも連れて行っていただいたりしていた。考えてみればきのこの観察と採集をはじめて数年たち、自分のよく行く場所の目立つきのこは何となく把握してきたところなので新しい発見というものも徐々にすくなくなろうというもの。

しかしどうにも雨が少なかったり、フィールドに出たタイミングが運悪かったり、馴染みの公園の管理体制が変わってとつぜん花壇だらけになったりといったことが続くとたいへん貧しい気持ちになってくる。さらに友人知人やインターネットSNSのいっばいきのこ出てるよ情報などみると焦るばかり。そうこうするうちに秋のきのこの季節もほぼ終わってしまった。

11月7日、気温が下がり雨もそこそこ降ったので、せめて冬のきのこを探そうとヒラタケやエノキタケのポイントを回遊すべく出かけた。まず最初に見つけたのはニガクリタケで、さらに歩くとスッポンタケのだいぶ大きくなったタマゴが複数。そして先々月の台風で折れた木にはエノキタケの幼菌がポツポツ。久しぶりのアイドル出現。このあたりになるとたぶん顔にはひさしぶりの無気味な笑みが浮かんできた。

次のターゲットは小川から少し上がった急斜面にあるヒラタケの出る倒木だ。見れば雨でふわふわと育ったヒラタケが手招き、いやカサ招きしている。ついついすべての人生が報われた気分になって慎重にちかづく、足下の腐った木切れの上にきのこのタマゴらしきものが数個。周囲に白い菌糸もすこし広がっている。さっきのスッポンタケにくらべるとだいぶ小さく、表面も虫に食われたのかザラザラしている。まだ幼菌らしく何の匂いもしない。ひとつ摘んで引っ張って見たら、つると殻が剥けてしまい、なかにあったのはサッカーボールのような模様のある球体。



とりあえず写真を撮って吹春先生にメールし、タマゴは3つほど採集した。

しばらく歩いているとメールのレスが着信し、それはカゴタケで、育ててみると良いでしょうとのこと。カゴタケといえば押しも押されぬ珍菌、ウルTRASーパーレアがこんな季節外れにどうしたのか、しばらくツイていなかったのはこのために運を貯めていたのか、あまりのことについて冷静になってしまったような気がしていたが、たぶんとんでもない目つきをしていただろう。急いで帰宅し、適当な容器に湿らせたキッチンペーパーを敷きカゴタケのタマゴを蒸しく鎮座。

そのまま気温は下がり卵には変化なしで10日ほど経ったあたりでようやく暖房を入れた次の日、卵から南国の果実のような匂いが漂ってきた。触ればゴリゴリした感触があり、ひとつは切れ目ができている。

さらに次の日11月19日の夜、もうひとつのタマゴが割れ、クシャクシャになったカゴがじわじわと姿をあらわした。



それから夜半過ぎまで観察するも、カゴの広がる力はあまり強くなく変化がすくないので暖房を消し就寝。

翌朝、カゴが開ききっていなかったので殻を切開すると、ごろんと中身が出てきて広がっていく。



カゴ自体は軽く繊細だが籠目は大きく内側にグレバが着き、何かを捕らえるというより球形に伸びて風や虫によって移動するためのものに思える。そして甘い熟れた南国果実臭がする。フィールドではこの匂いで虫を呼びながらカゴごと胞子が何処かへと転がっていくのだろうか。森をたくさんのカゴがコロコロと移動していくようすを夢想してしまう。保存したかったので、殻、カゴともに洗浄して自然乾燥させることにした。

11月21日、フィールドに残っているカゴタケのタマゴが気になって見に行ってみると、成長することなくそのままのもの、虫に食われて穴の開いているもの、誰かに採取されたか虫に食い尽くされたか影も形もなく菌糸だけ残っているもの、などなど結局カゴが出たらしいものはひとつも見あたらなかった。やはりこの寒い時期では気温と湿度が足りなかったのだろうか。それともカゴに成ることがカゴタケの目的ではなく、虫にさえ食われれば領地を広げることができて満足なのか。

11月22日、部屋のカゴタケのタマゴは南国果実臭でいっぱい。カゴタケの匂いを飽きるほど嗅げなんてきのこ好きの本望。キノコムシとして生きていけそうだと思う。切れ目のできていたタマゴを切開してみると、切れ目のところからカビが侵入していたのか半分痛んでしまっている。慌てて残りのひとつ

を切開すると、待ちかねたように骨色のカゴが出てきた。



しばらく待ち、大きく広がったカゴからピンセットでグレバを採取し別に保管、カゴは洗浄する。



先日から乾燥させていた前のカゴタケは小さく縮んでひとまとまりになってしまっていたので、再度水に浸けて戻し広げ、新しいカゴとともに丸めたキッチンペーパーを詰めて形成し乾燥させた。



採取したグレバは後日、発見したフィールドに持参し再会を願って撒いた。ついでに家の庭にも撒いた。撒きまくった。

完全に乾燥したカゴタケに、UV レジン液を塗って硬化させ保存する作業をし、下げ紐をつけてアクセサリとして使えるようにした。どのくらいの期間保存できるかは正確にはわからないが、これで当分はいつでもカゴタケを鑑賞できる。



このカゴは何かを捕らえるものではないだろうと書いたが、自分自身は思いっきり捕らわれてしまった。思えば今年、きのご観察も少し慣れてきて、いわゆる倦怠期というやつに突入していたのかもしれない。そんなところに狙いすましたように出現したカゴタケのおかげで、また飽くなき興味の泥沼、いや籠に閉じ込められてしまった。ただこの籠は途方もなく大きく、未知の部分がまだまだロマン過ぎる。まるで香山滋の小説の登場人物になったように、きのご奇妙な見た目と不可思議な行動にあたかも操られるかのように翻弄されるのが愉しく。「怪奇なものに仕えるのはオレの喜びさ」とうそぶくのは水木しげるのねずみ男だったか。

おわり